

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成21年 7月 第101号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

新たな一步を踏み出すに当たり

—介護の原点を問い直して—

介護保険制度が発足して10年目に入りました。制度創設に当たっての激しい議論の末、要介護1～5の介護給付に加えて、要介護には至っていない要支援ランクを設定して、予防給付が実施されました。そして5年の経過を踏まえての改正により、予防重視型システムへの転換が図られ、要支援ランクが1と2に拡充され、認定者の半数近くが要支援となっています。介護保険給付額の伸びが大きく、伸び率を抑える事が主眼とされた改正でした。

要介護にさせない、重度化させない効果のある介護には加算が付き、介護事業はリハビリや栄養改善に努めます。お年寄りもご家族も世間の人、健康で長生きしてこそ価値がある、として機能低下には敏感に反応し、その原因を追究して健康への努力と結果を求めます。

しかし一方で、老いて要介護になり、重度化して死を迎えるのは、肯定せざるを得ない老いの必然です。老いと共に要介護になり、重度化するに連れ、特養入所を待機しながら、病院・老健・ショートステイ・デイサービスを転々として過ごす人が多くなり、更には、亡くなる人の8割が病院で最期を迎えます。80年～90年以上の長きに亘って生きてきた人の、最期を迎える場所が中々定まらず、落ち着いた生活が出来ません。

人には、誕生と同時に最期が約束されています。その最期が何時になるかは人により夫々違いますが、世界中が共通して65歳以上を高齢期と認定し、最期への準備の期間としています。

人生の最終章を如何に生き、如何なる姿で完結させるのか。此れが高齢期を生きる人にとっての最大の課題です。

自分なりに周到に準備を整えて迎える最期の姿が、人にとっての最後の自己実現です。そしてこの自己実現の過程は、他者の協力がなくては実現せず、更にはこの過程が、子や孫や後世の人に、遺伝子では伝えられない大切なものを伝える、人として最後の生産活動ともなるものです。最期を迎える場所が定まらなければ、その準備が出来ません。大切なものを伝えることも出来ません。

《次ページに続く》

せいりょう園 渋谷 哲



《前ページより》

要介護にならないように、重度化しないように、と予防の努力をしながらも同時に一方で、要介護になり重度化して迎える最期に備えて、準備を整えなければなりません。そして老いの身体は確実にその準備に入っています。この予防と準備の双方に寄り添うのが介護です。

予防と準備と、介護は二面性を持ちながらも、最も主要な課題は人生が完結する姿を見届けることです。要介護の高齢者が、生活者として自らの生活空間の中で、家族や介護者たちに大切なものを伝えながら、自然に迎える安らかな生命の完結する姿に寄り添い、それを支えることが介護の最も重要な役割です。

予防重視型システムが介護に求める役割は、予防に偏重し過ぎています。幾ら予防に取り組んでも、人生が完結する姿に寄り添い支える、という最も重要な課題の解決には繋がりません。

日本では今、米の減反政策が40年近く続けられていますが、減反を続ける先には農業の課題を解決する途は開けてきません。日本の農業が直面する課題を解決するには、何時かは、米を作る事を基本にした政策に転換し、その先での工夫と努力と忍耐が必要です。

介護保険制度も、予防重視型システムから準備型システムに転換し、人生の最終章・完結編に寄り添い支える役割を介護に求める時期が、遠からず訪れるものと思います。

現実には既に多くの現場で介護はその役割を担い、多くの現場が、予防意識との狭間で混乱し疲弊しています。一時も早い時期での政策転換を望みます。

人生を締め括る過程に寄り添う役割に相応しい、人格と知識と技術を身に付ける事、が介護の原点です。

老いと死を巡る思想や理念や宗教、人生の最終章の過ごし方、完結する姿の理想像、それを支える介護や医療に求められる知識や技術、多くの事柄について様々な観点から深く議論をし、工夫と努力を積み重ねながら、ご利用者やご家族や地域の人々の理解を得て、介護事業を更に推進したいと願います。

これから迎える超高齢社会は、要介護になって最期を迎える高齢者が溢れる社会でもあります。介護を巡るやりとりの中で、遺伝子では伝わらない大切なものが人から人へと伝わっていき、多くの人の心の中で精神的な営みが沸き起こり、思想や宗教や芸術が人生を豊かに彩り、文化と活力が溢れる地域社会が実現する、そんな超高齢社会への途を開く介護でありたい、と願います。

市場と契約が介護保険事業の原則です。政策転換を待たずとも、利用者と事業者の創意と工夫と同意により、様々な取組が可能です。

いにしえより多くの人が往来したこの野口の地・長砂の一角にある『せいりょう園』が、長い人生を締め括る居住の場・安住の地となり、お年寄りが落ち着いた暮らしの中で、遺伝子では伝わらない大切なものを次の世代に引継ぎ、地域社会に向けて思想や文化を発信できる介護事業を行いたい、と心より念じます。

## せいりょう園待機者状況

＜平成21年 7月14日現在＞

入所判定済み者 319名 グループの内訳  
グループ...121名 / グループ...131名 / グループ...67名

### ○入所判定済み者の現在状況

在宅124名 / 特別養護老人ホーム入所中9名 / 医療機関入院中84名  
老人保健施設入所中82名 / ケアハウス入居中3名  
グループホーム入居中6名

辞退その他：せいりょう園入所4名 / 他施設入所1名 / 死亡6名

## 自彊術療法をご一緒に

せいりょう園では今年の4月より、ケアの一環として自彊術療法を取り入れました。椅子に座ったお年寄りに、職員が肩や腕や手足を撫でたり擦ったりして、身体の強張りをほぐします。そしてこれが、心の強張りをほぐす事にも繋がります。

毎週水曜日、午後3時より約30分間、特養1階のホールで、自彊術普及会の奥伝免許の指導者の指導を受けて、各事業所のお年寄り職員がペアとなって行っています。

介護が必要な状態になっていく過程で、人は大きな不安を抱えて暮しています。その不安が心と身体の強張りをつくり、暮らしが何となくぎこちなくなっていく。まず身体の強張りを少しほぐす事で、心も少しほぐれます。そして少し楽な気持ちで暮らせるようになっていきます。施術者自身の療法にもなるといわれています。

最近、福祉先進国・スウェーデンからタクティールケアという手法が日本に導入されています。手や足や肩を撫で擦るマッサージに似た手法で、体内で安心ホルモンの分泌を促進する、と紹介されています。

日本人が大正時代に考案した自彊術療法を応用して、片麻痺や認知症のお年寄りの身体と心を少しでもほぐす機会として、ご家族の皆様方にもお手伝いして戴ければ、と考えています。家族としての縁をつなぎ、お互いの安心感や信頼感を深める機会として、是非ご一緒に試してみてください。お待ちしております。

## せいりょう園 7月の行事

**7月 1日(水) 誕生会**

**音楽療法**

**自彊術療法**

**7月 4日(土) 園長との懇談**

**7月 6日(月) 仏教講話**

**7月 7日(火) 七夕(そうめん)**

**7月 8日(水) お話グループ・福寿草の会**

**自彊術療法**

**音楽療法**

**7月10日(金) ひより手芸教室**

**7月14日(月) 花こま 猿まわし**

**7月15日(水) 自彊術療法**

**音楽療法**

**7月19日(日) 土用の日**

**7月20日(月) 美容の日**

**7月22日(水) お話グループ・福寿草の会**

**自彊術療法**

**音楽療法**

**7月24日(金) 介護者の集い**

**～家族の役割 地域の役割～**

**7月27日(月) 理容の日**

**7月29日(水) 自彊術療法**

**郷土料理 (かつめし)**



7月14日 民族歌舞団 花こま



6月27日 木野雅之のヴァイオリンリサイタル

## 介護者の集いー認知症サポーター養成講座ー テーマ「利用者の外出について」

せいりょう園老人介護支援センター  
社会福祉士 吉田 知一

今回の介護者の集いでは、「利用者の外出について」をテーマに話をさせていただきました。内容に入る前に、せいりょう園の利用者が外出する際の介護の考え方について話したいと思います。せいりょう園ではどの施設でもカギを閉めていません。利用者が外に出たいということであれば、その思いを尊重しています。権利と責任のある一人の人間として尊重しています。ただし、職員が外出に気づくことが出来れば後ろから見守りという形でついていきます。

この考え方を踏まえた上で、実際にせいりょう園で生活されている方が、どのように外出しているのか、そして私たちが、どのように介護しているのか、4人の職員から外出の事例を発表してもらいました。

### ○事例発表

#### ・せいりょう園グループホームまどか職員

まどかに入居されている方。外出の際には、自分で外出の用意をし、自分の名前と連絡先が分かるものを自ら首から下げて外出され自力で戻ってこられる。すべての方が自分で戻ってくる訳ではなく、限られた職員体制の中で出来ることをしている。地域の関わりが必要であると感じている。

#### ・ユニット型特別養護老人ホーム職員

外出されても自分で戻ってくることが出来る方だが、他人の畑から野菜をとってきてしまった。本人は農家の方から貰ったと言っているが、職員が確認すると無断で収穫してしまったことが分かる。本人の思いを尊重することは大切だが、迷惑をかけてしまった場合はどう考えるべきか。

#### ・従来型特別養護老人ホーム職員

外出された方を後ろからついていくが、本人は嫌がり傘で威嚇する。自分で車をヒッチハイクしようしたり、「トイレを貸してください」と家を訪ねたりする。認知症の症状の進行によって本人の行動も変わり、依存心が強くなるなど日々変化を感じる。

同じように家を訪ねてくるようなことがあれば、皆さんはどう考えるだろうか。

#### ・せいりょう園グループホーム職員

外出される方も様々な方がいらっしゃり、ケースバイケースで、その都度考え対応させてもらっている。その人に合った距離感を保ち後ろからついて行くがその中でも交通事故などの様々なリスクがあり、職員も日々考えさせられることがあります。

そのようなリスクを皆さんはどのように考えるだろうか。

### ○グループワーク

今回のグループワークもテーマにこだわらず、自由に考えていただきました。

4つの事例の中には、普段職員が介護する中で考えさせられる場面がたくさんあり、グループワークの題材として、皆さんにも同じように考えていただきました。



### グループの意見

- ・外に出すのは危険ではないか？命が一番に最優先すべきことではないか？
- ・家族は安全で安心な施設だからこそ入所させているのでは？契約の時はどのような話をしているのか？納得しているのだろうか。

- ・認知症の方は、自分で自分のことが分からないので、周りが環境を整えてあげる必要があるのではないかと、それが、カギのある安全な施設ではないだろうか？
- ・他の施設のほとんどは外に出ないようにカギをしているのに、せいろ園の介護の方針には頭が下がります。その分、職員さんが大変だと思います。
- ・外出の時は後ろからついていくが利用者との距離が離れているのでは？
- ・近くなりすぎると拒否があって、余計に危なくなることもあるのでは？
- ・自由に外を歩くことは責任が問われるのでは？お金を払うなどの行為が出来るのか？
- ・地域に存在するスーパーなどの協力が必要なのでは？
- ・地域にも徘徊する人がいるので、認知症になっても暮らせるという良い発信になっているのでは？
- ・野菜を持っていった人が認知症という病気であると説明すれば、大丈夫ではないか？
- ・誰であろうと無断で持って行くことは泥棒になるのでは？
- ・趣味で作っている畑であれば、大目に見てくれるのでは？家業の場合は責任をとる必要があるのでは？
- ・せいろ園の介護方針は、家で介護している人にとっては、実現することは難しいのでは？施設だから出来ていることだと思う。

4人の事例の中には、介護の場面で考えさせられる題材がたくさん散りばめられていました。あるグループの方の意見では、命が一番に最優先すべきことであると、認知症は何も分からなくなる病気なのだから、施設の中で、整った環境で暮らしてもらうほうが良いのではないかと、という意見がありました。認知症の方は何も考えることが出来ない方なのだと感じていると感じ、認知症の方に対する視点が私たちと違うものなのだと感じました。

普段、認知症の方と接していると、その方が何かしらの思いを巡らせて生活をされていることに気づかされます。特に今回のテーマである外出についても、何の意味もなく考えずに外に出て行っている訳ではなく、何かしらの思いを巡らせて外出されています。ただ、その何かしらの思いが何なのかということは、本人にしか分からないことですが、本人の言葉の節々から汲み取ることは出来ます。昔のことを思い出し子供を迎えに行く、田んぼの仕事に行くなど、現実には即していない理由もありますが、本人の中では現実に起こっていることなのだと気づかされます。それを止めることは、本人の自尊心を傷つけ、更に不穏になってしまうということが良くあります。ただ、自分の力以上の事、出来ないことをしようとした時には、その方の生活力がどこまであるのかを見極め、介護職がサポートするか、もしくは出来ないということを受け入れてもらう必要があるのだと感じています。

この介護者の集いの中では、利用者の外出について皆さんと一緒に考えていくことが目的なので明確な答えを出していません。実際の介護の場面でも、答えはなくケースバイケースだと思います。ただ、認知症を患っていてもいなくても、生活のリスクが現実のものとして起こるということは誰にも分からないことなのです。それを私たちが抑制するということは、本人にとっては満足の行かない生活になるのだと思います。認知症の方も要介護者で障害のある方も、私たちもそうですが、何らかのリスクの中で生活をしています。その方たちは皆、カギのある施設で隔離することが、最も良い環境であるならば、私はこれから歳をとり、おじいさんになっていくのが怖くて仕方ありません。皆さんは、どう思いますか？

### 次回の介護者の集いは？

7月の介護者の集い

テーマ「家族の役割、地域の役割」

8月の介護者の集い

テーマ「介護保険の施設とはどういうものか」



## Y様のターミナルについて

ユニット型特養 介護士 塩田 知加

私が入社した頃、Yさんはショートステイを利用されていて、手が届く範囲のみまだ目が見えるという状態でした。“何でも出来ることは自分で”としっかりと自分の意志を示し、長い髪の毛を毎日とてもきれいに結っておられました。目がほとんど見えない状態でしたが、職員の手をほとんど借りずに過ごされていました。歌を歌うのが好きで、毎日食堂にYさんのとてもきれいな歌声が響き渡っていたのをよく覚えています。

その後、特養へ入所となり、ユニットが建ったのと同時に二丁目へ転居されました。ユニットへ移られた頃には、目は見えない状態になっていましたが、“何でも出来ることは自分で”と言うスタイルは変わらずでした。目が見えない事により、恐怖感もあり介護に対して拒否が見られる事が多々ありましたが、介助後は「どうもありがとうございます」「ごくろうさん」と言って下さいました。食事量の不安定な時期もありましたが、二丁目職員同士で食事形態を工夫していき、また、高齢ではあったので日中も居室にて休まれる事が増えてはいましたが、特に大きな状態変化もなく過ごされていたと思います。

Yさんが寝たきりという状態になられたと休み明けに知って、二日前には自分でご飯を食べて会話も出来ていたのになぜ？という気持ちで一杯でした。ご飯も水分も拒否が続く中で関わっていく間、どうして急にこういう状態になられるまで気づけなかったのだろうと、とても辛くなり、Yさんに対して申し訳なくなりました。状態が悪くなられてから、毎日のようにYさんのご家族の方がたくさん来ていただけて、毎回「いつもありがとうございます」という言葉を受けて、複雑な気持ちで関わっていました。

ターミナルの時期を迎え、面会の間にご家族と色々な話をする機会が増えました。この事は私たち職員にとっても、とても良い時間だったと思います。お嫁さんは、「私は誰よりも長い間おばあさんと一緒に過ごしてきたの」と、せいりょう園を利用する前のYさんの生活歴を色々話して下さいました。

「絶対に私（嫁）の悪口なんて他人に言わなかった。私がいないと玄関前で待ってたりしてね～」など、今まで知る事の出来なかったYさんを知る事が出来てうれしかったです。

食べ物も水分もほとんど受け付けなくなってきており、水分は綿棒でコーヒーやお茶など口を湿らせる程度になり、「こういう状態になったら今後どうなっていくんですか？」と言う質問を何度かされました。ご家族の中でも、とても不安だったと思います。「家にいても気になって（せいりょう園に）来てしまう」と何度も言われました。初めは、ご家族間でもこのまま看取るのか、点滴など出来る限りの医療的な対応をしたいという方もおられ意見が分かっていたそうです。「でも、痛い思いをするのなら自然にまかせて看取りたい」と言う話にまとめ、こまめに職員もご家族も訪室していき最期の時を過ごしました。お亡くなりになる前日の夕方に「やっぱり気になって」とお嫁さんが再度面会に来られました。その時、Yさんとお嫁さんの繋がりが強いなと感じました。

ご家族は、息を引き取る瞬間に立ち会いたいという希望もありましたが、一度ご自宅に戻られ、Yさんは朝方お亡くなりになりました。その後、死後の処置をご家族の方と一緒に行いました。亡くなられてすぐに10人ほどの親族の方が来られ沢山の方に最期の時に関わっていただく事が出来ました。亡くなられる瞬間にはご家族は立ち会えなかったのですが、死後の処置が終わった後にお孫さんとひ孫さんが「おばあちゃんお星様になったんだね。とってもきれいなお星様になったんだね」と言われたとき、不安で複雑だった気持ちが晴れました。長い間苦しむことなく、自分の思いをつらぬいて静かに息を引き取られた事はとても良かったなと思いました。

Yさんは全盲で会話も長続きしなく、関わる時間が少ない方だったのでもう少しきちんと関わる時間を持てていられたらなど、亡くなられてから強く感じました。今回の看取りで、利用者とのかわりについて考えさせてもらえました。日々、利用者の体調や表情などの変化を一つ一つ大切に感じとっていきたいと思います。



今回の仏教講話は別府町にある真言宗、宝蔵寺新見ご住職に来て頂いた。ご挨拶させて頂いた時、資料を用意されている様子だったので伺うと「私喋るの苦手なんで、今日は写真を持ってきました。それを導入部にして講話、いや雑談させてもらいます」。言葉通り真に受けるつもりは無かったが、あまりに真顔で話されるので、あるいはと。が見事に裏切られました。

講話が始まる。2枚の写真が紹介される。それは立派なオリーブの花と木の写真だった。木の写真は神戸新聞に掲載されたもの、花の写真は学生が自分の研究テーマにしたいと撮影を依頼してきた時のもの。いずれも有償で入手されたとその金額まで口にしてにこやかに話される。この立派なオリーブの木の生い立ち、なれそめについて。明治維新以降、国は殖産興業の号令の下、いろんな産業を興していったがオリーブ園の開設もその一環であった。その後、これらの産業は民間に払い下げになり、その際地元企業の創業者がオリーブの木2本を寺に寄贈した。その木も今や樹齢130年、某テレビ局の取材も受けた。撮影4時間、放映2分。前宣伝が効き過ぎて檀家衆から「住職、あれだけですか？」には参った(笑い)。場の雰囲気一段と和む。とつとつと話される言葉が心地よく、深く話に引き込まれていく。

次に江戸中期の俳人、滝瓢水(たきひょうすい：加古郡別府村生)の話。境内には筆塚と句碑もある。これまで聞いたことはあっても読み人知らずだった句を耳にする。

- ◇ さればとて 石に布団も 着せられず
- ◇ 蔵売って 日当たりよき ボタンかな
- ◇ 手にとるな やはり野に置け 蓮華草

さればとて・・・については、

滝瓢水の生家は大富豪であったが、商売には一切関せず俳句三昧で財産を食いつぶしてしまう。自由奔放を許してくれた母、しかし瓢水が慌てて帰郷したときは、とくに母の身儀は終わっており、親類の怒号を浴びながら墓前にひざまづき、この句を口にしたとされる。蔵売って・・・には、彼の放蕩の果てが感じられ、笑うに笑えないペーソスを感じる。

自由奔放に暮らし、大切な母の死に目にすら会えなかった瓢水。親類縁者から古川柳に言う『親孝行 したい時分に 親はなし』と揶揄、罵倒されたのであろう。ところが、

- 親孝行 したいときには 親はなし 今は、状況も変わってきて
- 親孝行 したくないのに 親がいる との替え歌川柳までであると言われる。

古川柳の時代は、さしづめ『生活も少し楽になって、親に伊勢参りでもさせてやりたいと思う頃には親はもうこの世にはいない』ところが人生50年の頃はこれで良かったが、親の寿命も延びて、したくないのに・・・との不謹慎な川柳まで誕生する。しかし、今は子の方の生活がなかなか楽にならないから、やっぱり同じことが言えるのかもしれないが。

ここから先祖(親)を祀る話に移っていく。一昔前までは家を継ぐ、財産を引き継ぐ、先祖を守るのは嫡子と決まっていたから問題も無かったが、今は法律も変わり複雑になってきている。いろんな実例をあげながら話される。

「親の面倒なんか見たくない」とか、「先祖を祀っても、拜んでも仕方がない」と言う人もある。しかし『今日一日が無事であったことに感謝』することは大事なことで、それは取りも直さずご先祖のお陰であることを感じることでもある。その心を素直に表現することはとても大切なことではないか。いつか読んだ『日本文化』に関する一文を思い起こす。

『日本文化には、呼び戻してもてなす心がある。日本文化には「生」だけではなく、その中心に「死」、「無」がある。日本人の二大イベントである「正月」、「盆」はまさに死の世界にあるものを呼び戻してもてなす行為、行事である。

日本人の中にある「道德観」、「倫理観」、「美意識」は死者を送り、また呼び戻してもてなす中にこそ存在し、死を通して人間間の愛は完成するのではないか』このような内容であったと記憶する。

最後に、もう一句

◇ 浜までは 海女も蓑着る 時雨かな (宝蔵寺内句碑) を紹介される。

海女たちの、どうせ海水で全身濡れてしまうのかもしれないが、せめて浜までは 時雨で身体を冷やさぬように蓑を着てわが身をおもいやる姿を詠ったもので、仏教で言う『その時々を一生懸命生きるということが大事である』に通ずるものと思われる。

「この世には、上り坂もあれば下り坂もある。時にはマサカ!の坂もある。うまい言葉に惑わされることなく、さりとして苦しいこと、悲しいことに負けることなく、全てを克服して今日を大切に生きていって下さい。しかしおかしいと感じたら遠慮せず、『おかしーい』と書いてください」とエールで締め括られた。ありがとうございました。

来月8月の仏教講話はお休みです。

夏バテ、熱中症にご用心! 充分睡眠をとって、水分、塩分を小まめに補給しましょう。

今回は9月7日(月)を予定します。

### 平成21年度第1回グループホーム・小規模多機能型ホーム運営推進会議の報告

日時 平成21年6月13日(土) 14:00~16:00

場所 特別養護老人ホームせいりょう園1階ホール

参加者 推進委員 : 8名 利用者 : 2名 利用者家族 : 2名

施設長 ケアハウス施設長 職員 : 4名

内容(意見交換より)

① 先日6/9に開催した二市二町グループホーム協会勉強会のテーマ「認知症になりたいか、なりたくないか」の問いの中で「なりたくない」との答えが参加職員の殆どであったとの報告から

- ・ 認知症になりたくない。当然である。その為の努力をすることも良いと思うがそこで思考停止をしないで、なった時にはどうするのかも考えておく。
- ・ 介護する側であれ、あんなふうになりたくないと思うことがあっても良いのでは。そのこととは別に介護していくことは人間としては当然のこと、介護職としては許容量を大きくもてるかどうかである。
- ・ 認知症の方を支えていくには家族、地域、施設が一体にならないと支えきれないのでは

② 利用者の家族から質問

- ・ 小規模多機能型ホームは介護保険の枠組みの中に入っているのか?  
@新しい制度として発足しました。
- ・ 認知症の方の数がとても増えていると思うが何が原因なのか?  
@高齢者の方々が増えているということで、特別に認知症の方の数だけが知っている訳ではない。

### ケアハウス等空き情報 <平成21年 7月14日現在>

#### ケアハウス

- |         |          |            |          |
|---------|----------|------------|----------|
| ・むれさき苑  | : 1人部屋2室 | ・青山苑       | : 2人部屋1室 |
| ・シスナブ御津 | : 1人部屋2室 | ・ウヰルンガはりま  | : 2人部屋1室 |
| ・香楽園    | : 2人部屋1室 | ・ケアハウスアゼリア | : 1人部屋2室 |
|         |          |            | : 2人部屋1室 |

#### バリアフリーマンション

リバティかこがわ 1室

[問合せ]せいりょう園介護相談室 (079)421-7156/(079)424-3433